「大極上請合売心学早染草」の「理屈臭き」趣向

― 教訓との関係を再考して ―

久保田　愛

一

寛政二年刊行「大極上請合売心学早染草」（以下「早染草」と略す）は、山東京伝による黄表紙の中でも代表作と呼べるものの一つである。流行の心学を題名に冠し、滑稽で愛嬌のある善魂悪魂を登場させたこの作品は、当時大いに評判を得た。

さて、その「早染草」序で京伝はこのように述べている。

画草紙は。理屈臭きを。嫌ふといへども。今そのりくつ臭きをもて。一ト趣向となし。三冊に述て幼童に授く。もし其理を得ることあらば。天竺の親分も。方便を懐にして退き。魯国の伯父も。天命を袖にして去るべし。しからば我国の姉子なんども。清く浄とし給ん哉[注1]（三二五頁）

つまり、黄表紙にとって禁忌であった「理屈臭き」趣向をあえて用いた作なのである。さらに、寛政二年に京伝が上梓した黄表紙全八作品のうちの二作品「京伝憂世之酔醒」（以下「酔醒」と略す）「地獄一面照子浄頗梨」（以下「浄頗梨」と略す）において、黄表紙と「理屈」の関係についての言及が見られる。

老子曰信言美ならず。美男為にならず然り。艸双帋は。理屈臭きが故に貴からず。茶なるを以て貴しとし。女郎買は。色男なるが故に貴からず黄金を以てたつとしとす。於レ是当世也ト云々（「酔醒」自序、二六五頁）

東西々々、これより世上の御子様方へ、つらりつと口上の申上ます。歳々古めかしき草双紙の趣向御覧に入れまする所、御評判宜しく遊ばされ下され、いかばかりか有難ふ、何がなと存じましたが、さしたる趣向もなく、ふと存じ付、昔、小野篁地獄へ往来いたされし旧事を和らげ、御覧に入れまする。筆も回らぬ一作ゆへ、御目まだるいがちにござりませふが、まことに御子様方の御目覚しの端くれがでござりまされ

ば、大人様方は御目長に御覧下されませ。とかく理屈臭ひ事ではなく、耳をとつて鼻をかむやうな大のむだにて、筆の行方定めぬ戯れ事、ひとへに御子様だましのお笑ひ草でござります。そのための口上、左様に。（「浄頗梨」口上、一三二頁）

黄表紙にとって「理屈」は避けるべきものであること、これが三作の記述から一貫して読み取ることができる京伝の考えである。

ここで、「理屈」が具体的に何を指すのかという疑問が浮かび上がってくる。これに関して、「早染草」序の「理屈臭き」については、これまでも注釈および解説がなされてきた。以下、それらを列挙する。

水野稔氏『日本古典文学大系　黄表紙　洒落本集』

【解説】いちはやく「理屈くさきをもて一ト趣向」とすることに着目して、心学流行にあてこんだ作品である。（中略）一人の人間における善悪二つの魂を擬人化してその争闘をお家騒動の筋に仕立て、当時評判の心学者中沢道二まで作中にあらわして、教訓を正面から押し出している。

【頭注】〈金々先生栄花夢〉の黄表紙発足以来これを鉄則として来た。

寛政改革の朱子学奨励や心学教化の影響であるが、ここに作者の野心的な意図が見られる。(注2)

中山右尚氏『江戸の戯作絵本』（三）

【注】道理・教訓。黄表紙はむしろ「理屈」を茶化すものだが本作はその逆をいくの意。

道理・教訓をそのままに構想して。

【解説】「理屈臭」さとは、道理・教訓とそのもつ雰囲気と解釈しよう。すなわち、本作にあっては、道理にもとづく筋立（ストーリー）とその内容の教訓性ということである。(注3)

棚橋正博氏『新編日本古典文学全集　黄表紙　川柳　狂歌』

【頭注】教訓臭さや道理詰めのこと。

教訓や道理を茶化す黄表紙の常套とは違って、教訓や道理をそのまま趣向とする。

【解説】善魂・悪魂の働きや所業、葛藤が人間の行動に反映すると見立て、逆に人間の心のありようも魂の行動を律すると見立て、それら一々の因果関係を絵解きしながら話の展開を図ったことは確かに理詰めであった。また、心学者中沢道二に重ねた道理先生の理非をきわめた教訓をもって結びとしたことも理屈に走った印象を強めている。こうした理屈臭さこそが今の黄表紙の新機軸であると、京伝は序文でことさらに断り強調している。それは、文芸にも束縛をもたらした寛政改革の時勢に逸早く対応しようとする京伝の所懐でもあったろう。(注4)

右のように「理屈臭き」は、心学を用いたことにより生じた教訓

的要素と結び付けて定義されている。(注5)

出版界にも影響を及ぼした寛政改革により、京伝自身も寛政元年には画工として、同三年には洒落本作者として筆禍を被った。「早染草」は、京伝が画工として処罰を受けた年に執筆された作品で、しかも庶民教育の思想である心学を題材に用いているために、これを教訓的な黄表紙とする評価が下されてきたと思われる。そして作品の主題に対する評価がそのまま、序の「理屈臭き」を教訓と解釈することにつながっているのだ。しかし「早染草」序の宣言については、これが「早染草」の趣向を指し示す重要な言葉であり、同時期の他作品に同じも言葉が見られるのにもかかわらず、取り立てて詳しく考察されてきたわけではない。

筆者は複数の寛政二年刊行作品の序や口上に「理屈臭き」という言葉が見られることや、この時期の作品の中で「早染草」のみが教訓的作品であると評価されていることに疑問を抱いたことから、「早染草」の趣向を再考し、序に込められた京伝の意図に正しい解釈を加える必要があると考えた。本稿は、資料を通じて京伝の考えを読み取り、「理屈臭き」趣向を作品の内容と具体的に結び付けてとらえ直すことを試みたものである。

二

「早染草」を教訓的にしている要素としては、石門心学の教えと通じるいくつかの考え方が作中に記されていることと、結末部に心学者中沢道二に擬した道理先生が登場して主人公理太郎を改心させることが挙げられるだろう。

心学の教えが含まれていることについては、「早染草」にある文言と、心学書に見られる語彙・言い回し・考え方との類似など、中山氏による詳細な指摘がある。(注6) ただ、単語のみの類似を挙げたものは実際に心学を由来として使用したのか疑わしいし、教えに関するものもそのひとつひとつにおいて京伝がどこまで心学を意識していたかは定かではない。けれども、「幼きは白き糸のごとく、いかやうにも染まるものなりとは、むべなるかな。」(三二七頁)「型のごとく律儀者ゆへ、朝も早く起き、夕べも遅く寝て、ずいぶん万事に心を配り、倹約をもとゝとして、親に孝を尽くし、家来に憐れみをかけ、算盤を常に離さず、内外を守りければ、その近辺に評判の息子となりけり。」(三三〇頁)などの教訓的な表現が散見することは紛れもない事実である。

一方、道理先生は作品の結末部に登場する。

理太郎は、道理先生に命を助けられし上、儒・仏・神の尊き道を聞き、今は先非を悔ひ、本心に立帰る。(中略)

「人間万事大切なるは一つ心なり。皆おのれが心より出て、おのれが身を苦しむる。その心はすなはち、魂じや。こゝの道理を、とくと合点せねばならぬ」(中略)

道理先生ことぐ〳〵く教訓してのち、目前屋の両親に、勘当の詫びをし給ひければ、両親も大に喜び、さっそく呼返しければ、理太郎、是より道を明らめ、親に孝を尽くし、眷族を憐れみ、大君子とぞなり、家富み栄へける。これみな道理先生の仁徳なりと、世に言ひもてはやしける。（三三九～三四〇頁）

追剥にまで身を落としていた理太郎であったが、通りかかった道理先生の講釈によって心を入れ替えるところで話はめでたく結ばれる。このように、一度は堕落した主人公の改心で結ばれることも、確かに「早染草」を教訓的にしているといえる。

ところで、このような教訓性は「早染草」特有のものなのであろうか。冒頭で紹介した「酔醒」「浄頗梨」の二作品を見てみよう。まず「酔醒」であるが、これは次のような言葉によって締めくくられる。

京伝つら〳〵思ひめぐらしけるに、むべなるかな、我、天理に叶はざる及びなき望みを思ひし妄念を退けんと、狐の化かせしは、我がための大師なり。腹太餅も美食と思ひ、夜鷹も美人と思はゞ、足る事を知るべし。ア、迷ふたり〳〵と、たちまち悟道して、長く清貧を弄び、一個の隠者となりて、心ゆたかなる春を迎へけるとなん。（二八〇頁）

「酔醒」は京伝自身が主人公として登場する作品である。狐に化かされていることも知らず贅沢三昧の生活を楽しんだ京伝であったが、最後に遊興費の掛取りにやって来た男たちによってことの真相を知る。そして、かたとして身ぐるみ持って行かれた結果、このように反省をするのである。不相応の振る舞いにはつけが回って来、結局は今の生活に満足するべきだと悟る、教訓的な結びであると言えよう。

もう一方の「浄頗梨」では、地獄巡りを終えた篁が最後に娑婆に帰る場面にこのような文章がある。

かくて篁は、一百三十六地獄を、残るところなく見物して、しばらく逗留せしが、今はそゞろに故郷懐しく、閻王に暇を乞ひ給へば、閻王も、篁の徳を感じ、深く名残を惜しみけれども、詮方なく、土産に数の宝を贈りければ、篁曰く、「楚国には以て宝とせず、唯善を以て宝とす」と、ひねり給ふところへ、三教の祖師出現し給ひ、釈迦は、味はい甘き酢を、樽に入て御持たせなされ、孔子は、今汝が音を知るとあつて琴、太神宮は、やわたの大蛇で作つた、清く潔き摘入を御持参なされて賜はる。篁、この三つの賜物にて、我は唯樽琴を汁のみ、と判じ給ひ、快く人間界へ立帰り給ふぞ有難き。（二四六頁）

篁が帰っていくのを惜しんだ閻王は数々の宝を贈るが、篁は『大学』の言葉を引用して辞退する。そこに三教の祖が登場し、我は唯樽琴を汁のみ（引用者注・我は唯足ることを知るのみ）と表現して

篁の仁徳を賞美する。篁の振る舞いと三教の祖の言葉からは、宝よりも善を尊び知足安分に落ち着くべしとの教訓が感じられる。

ところで、いま引用した二作品の結末部には共通して「足ることを知る」という表現が用いられていた。この言葉はさらに、同じ寛政二年の刊行である「太平記吾妻鏡玉磨青砥銭」の結びにも見ることができる。

北条時頼の家臣青砥左衛門藤綱、鎌倉の手合の気取りをつら〳〵考へて、はなはだ戯けに思し召し、針ほどの事を棒ほどな仕方を示し給ひ、「この上は、芝居も角力も女郎も、ありきたりの通りいたすべし。したが、心には此一ッ銭を忘るな」と、なめし革の早道から、一文の銭を取出し見せ給へば、鎌倉の万民、ちやうどよい加減の料簡となり、扇屋の格子ではないが、青漆の御代万〳〵歳ぞ、めでたけれ。その文字には、吾唯知レ足と記したり。中の口を四字に用ひたるも、無駄のなき世の中なり。（二二七頁）

当時一般に広く知られていた『老子』の言葉であったとしても、寛政二年刊行の三つの黄表紙に共通して記されたのはなぜであろうか。

石川謙氏はその著作の中で「知足安分」が心学の教えの中で重要な位置を占めることを指摘し、[注7]心学の祖である石田梅岩の「都鄙問答」巻之一「播州ノ人學問ノ事ヲ問ノ段」から言葉を引用している。

（引用者注・孔子は、委吏や司職吏などの役職さえも熱心に務めたという話をうけて）此時ノ天命ニ安ジ玉フ。コレヲ法トシテ、士農工商共ニ我家業ニテ足コトヲ知ルベシ。論語ヲ讀者、カホドノコトヲ知ラザランヤ。凡テ道ヲ知ルト云ハ、此身コノマヽニテ足コトヲ知テ、外ニ望コトナキヲ、學問ノ德トス。[注8]

京伝が生きていた当時の江戸に心学を広めたのは中沢道二である。その道二の著作にも「知足安分」の思想を見ることができる。道二による道話を記したもので最も早くに世に出たものは「道二翁前訓」であり、[注9]その中には、哀れな夜鷹の話を例にしてこのように教える箇所がある。

親が有りても、貧家ではくはす事もならず、夫が有りても、病身もので、喰はせる事もならず、死ぬにも死なれず、是非なくかゝる世渡りするも女じやぞへ。銘々身に引きくらべてごらうじまし。勤といふ字に二ッはない。足る事を知らうぞ〳〵。不足所じやないわいな。[注10]

「道二翁前訓」は童子を対象に行われたものであるが、一般に向けて行われた講釈を聞書して寛政七年から文政七年にかけて順次刊行された「道二翁道話」にも、「足るを知る」「足納」という知足安分の教えは枚挙に暇がないほど見ることができる。[注11]

そして寛政初年の江戸で心学が大いに流行っていたことは、京伝

の黄表紙からも読み取ることのできる事実である。例えば「早染草」では悪魂が「『此頃は、心学とやらが流行る』」（三二九頁）と言っており、「浄頗梨」にも「当世はやる心学」（二四〇頁）といった記述がある。さらに「山鹿鳩蹴転破瓜」（寛政二年刊。以下「破瓜」と略す）にも「『この頃流行る心学』」（三二〇頁）とあり、その隆盛をうかがい知ることができる。つまり、京伝が「足ることを知る」という言葉を多く用いたことの背景に、流行の心学を利用しようという意図を読み取ることも充分に可能なのである。仮にこれが心学からの引用ではないとしても、当時の読者には心学を彷彿とさせる教訓的な言葉として受け取られたであろう。

本稿の冒頭で提示したように、「酔醒」自序では「理屈臭き」ではなく「茶なる」黄表紙を貴ぶ従来の価値観が示され、「浄頗梨」口上では「理屈臭ひ」ことは書かないとされていた。にもかかわらず「理屈臭き」を趣向とすると宣言した「早染草」にも、「理屈」を敬遠する姿勢を示している「酔醒」「浄頗梨」にも共通して、心学とも関連する「足ることを知る」という教訓を見ることができる以上、京伝が言う「理屈」を教訓という意味で解釈することはできないであろう。

三

「理屈」という語を京伝の意図に沿って解釈するために、用例からその字義を帰納的に推考したい。水野稔氏『山東京伝年譜稿』[注12]に従うと、京伝がなんらかの形で携った寛政二年刊行の出版物は全部で二十作品ある。その内、序を寄せた「新吉原細見」（正月および七月）・「呼継金成植」（時鳥館主人作・文橋画）と、校正および画を担当した「浅草絵馬磨光世中魂」（竹塚東子作）の四作を除く十六作品[注13]を確認することができ、「理屈」という語の使用例をいくつか見出した。そこで、京伝がそれらにどのような意味を持たせて用いているか、解釈を加えてゆく。

まず、京伝作の黄表紙八作品では、すでに紹介した三例以外にも二例が存在した。その一つは「早染草」に見られた次の用例で、悪魂が入っているために居続けで遊ぶ理太郎を、番頭が呼び戻しに来る場面でのものである。

理太郎が番頭迎いに来て、奥山もどきで理屈を言ふ。（三三六頁）

そして本文中にある番頭の台詞が、次のものである。

「左様に御料簡のないお前様ではなかりしが、天魔の見入れか、ぜひもねへ」（三三七頁）

「奥山」とは歌舞伎役者浅尾為十郎の俳名である。この場面で番頭は、為十郎のような口調で理太郎に「理屈」を言ったというのであるが、その番頭が言った台詞はというと、真面目で律儀であった以前の理太郎について触れ、それが落ちぶれてしまったことの原因

を求めて嘆くというものである。これ以外にも理太郎を連れ戻すためのより直接的な説得を行ったことも想像できるが、番頭のこの台詞には、なんとか理太郎を連れ帰りたいという訴えが込められている。

黄表紙ではもう一つ、「破瓜」にも用例が見られた。これは犬猿の仲である朝日如来と九郎介稲荷との間のいざこざと、それに巻き込まれる人間の色恋を描いた作品である。締めくくりに作者京伝は、突然に藪の中から田舎娘を飛び出させて棒踊りさせることによって、無理矢理に二者を和睦させて仕舞いをつけてしまう。しかもそれについて「なぜ田舎娘が出たか、それはどうも作者も知らず」と無責任なことを述べる。しかし「追加」の丁が付され、この意味不明の結末に納得がいかない如来と稲荷が京伝宅を訪問し、書き直しを要求するのである。そこで、答えに窮した京伝はこのように説明する。

その時京伝、席を打つて曰く、「それ狐は陰の獣也。又、九郎介といへば、夜に象つていよ〳〵陰なり」。「朝日如来は陽のちやき〳〵なり。陰と陽と和合せざるゆへ、いざこざが絶へぬなり。また田舎娘、形は女にして陰也。実は菊之丞なれば、男にして陽なり。陰と陽とよく合体したるものを出して、和合せざる陰陽を鎮めたは、これ目前の理なり。大明神さん、一言もあるまい。なくんば念のため、又候めでたかりける次第なり」と洒落る。（三二〇頁）

これに対して発せられるのが、如来の「『阿弥陀からだか、わからねへ理屈だ』」（三二〇頁）という台詞である。京伝がひねり出した後付の説明に納得ができない如来の気持ちと皮肉がよく表れた文章である。この用例には、相手を納得させるための説明や弁解といった意味が込められていよう。

他に洒落本にもいくつか用例がみられた。[注14] まずは、「繁千話」に見られた、次の二つの例である。

男 モウ是ぎりだ、ちくしやうめ。〈ト枕をふり上ル。女郎其手にすがり、又耳に口を付〉マアサ、わけをね聞ィておくんなんしョ〈トこれより両人せいては居れど、あたりをはゞかりたがひに耳こすりでりくつをいひあふ。耳こすりの口論其身ぶりをかしけれども筆に述がたし。跡はぶつツぶたれツ、瘡の内に手あやまちのできたやうに、声なしにがたぴしする〉（二六一頁）

女郎の真を疑った男が機嫌を損ねたのに対して、女郎は必死に「わけ」を述べようとするが、男は少しも聞き入れず、ついに口論になるという場面である。男は語気も荒く「枕をふり上」ており、そののちには「ぶつツぶたれツ」とあるように、ついには互いに手もでている。また「耳こすり」での「りくつ」の言い合いが、「耳こすりの口論」と言い換えられていることからも、これが非常に激

しいものであったことが予想される。したがって、この用例では、相手を言いくるめるために自分が有利になるような主張をまくし立てることを「りくつ」と称していることが分かる。

月の戸（略）風荻さんへ、よしかね、おかしくつてなりやァいたしいせんに、ちやんとわつちをしまいによこしんすはな。あの坊主に出るとがはしんせんねへ。でられねへといつてやりんしたら、こういつてまふしんすはな。生かはり死かはりうらんでやるッサ。風おめへ、あの坊さんのあだなを知つて居なんすか。月ィ、へ。風玉眼入の炭団と申ンすとさ月なぜねへ風あたまが丸くッて色が黒くッて目ばかり光りンすからさ月ホンニそふだよ。なぜあねへに色が黒ィねへ。色の黒ィがはやると思ツて居ンすかねへ。そりやァそふとお聞キなんし、せんどの理屈がまだすみんせんヨ。ヘトはなすそばからさし出て〉花モシィ（二二六三頁）

月の戸は客に関する愚痴を聞いてもらおうとしていたが、風荻が「坊さんのあだな」へと話題を逸らしてしまったため、このように言って話をもとに戻そうとするのである。自分に対して「生かはり死かはりうらんでやる」と暴言を吐いた「あの坊主」との間にそれからどのようないさかいがあったのか、風荻に聞いてもらいたい文句がまだあるのだ、という月の戸の気持ちが表れた用例である。

そして「傾城買四十八手」にも二つの用例があった。まず一つが次のものである。

〈扨はこよひは名代の客あるとみへたり。うせをつたらこふいふてあゝいふて、とむねのうちにいはんとおもふりくつをなんべんもふくしてゐるうち、又候あしをとしてしやうじをさらりとあくるゆへ、びつくりして又ねたふりすれば、わかいもの来て油をついで行〉（二四六頁）

女郎に待たされて暇をもてあました男は、ひとり床に入って寝たふりをして待つが、待ちくたびれて苛立ちが募っている。この後、別の客の相手を終えた女郎がやっとやって来るが、しびれを切らして帰りかけていた男は、女郎が止めるのも聞かずに怒鳴り散らす。

客やかましい。おどれがしつた事じやない。ふとひ女郎めだ。いひぶんがあるが、よふいはぬ。うぬがやうなくさつた女郎には、いふくちもたぬ。ァァわかひものに、はきものをおろさせろ。ちや屋のくるをまつてはゐぬ。かへる。とむるな。女郎それだつても、用心がわるふござんす。きついはらたちやうさ。客用心もへちまもいらぬ。なんでもかへる。をれがあしでをれがかへるに、だがなんといふものだ。そこをはなしをらう。ヘトよひからのむしやくしやばら、とむるほどこゑがたかくなる〉（二四六～二四七頁）

待つことは男にかなりの苦痛を与えていたようだ。どなりちらす場面には、女郎がなかなか現れなかったために「よひからのむしや

くしや」が鬱積していたという記述がある。この捨て台詞の数々から、ひとりの床でくさくさと考えていた「いはんとおもふりくつ」とは、女郎にぶちまけてやりたい文句や不満など、男の一方的な言い分であったことが想像できる。

最後に、同作に見られたもう一つの例である。

女郎も、帰した翌日はふさひで飯さへも喰はず役所をもひくなり。客も、うちへかへつても御持仏の阿弥陀さままでが女郎の顔に見ゆるもの也。何レ外から見ては馬鹿らしく見ゆれど、その身になつてはもつともな理屈もあるべきか。嗚呼されば捨てがたきは此道の迷ひなりと双丘のしれものも書きしにあらずや。（二五二頁）

小見出しに「真の手」とある話に付された評の最後の部分である。互いに真の心を抱いてしまった客と女郎のわり無き仲の成れの果ては、この引用箇所の直前にも長々と書かれている。女郎が本来の勤めを疎かにすることも男が身代を潰すことも、冷静な第三者からすればばからしく思えるが、当人らにすればその状況に至るまでの様々な事情や理由、苦労をしてでもいつか結ばれたいという深い思いがあるという意味に解釈することができる。

このように寛政二年刊行の作品における「理屈」の用例を見ていくと、黄表紙の二例では訴え・弁解などの意味、洒落本の始めの三例では主張・文句・不満といった意味、最後の一例では事情という意味で使用されていた。文脈に応じて様々な意味合いで使用されていたわけであるが、一様に他者を納得させるために自分の主張や文句をひたすら述べ立てる場面で使用されていることが分かる。また、「理屈」に教訓という意味合いを込めている例が皆無であったことは、先の考察に対する裏付けともなる。

四

「理屈臭き」を考える上で、ここで少し「早染草」の登場人物の名前に目を向けてみたい。なぜなら、主たる登場人物である目前屋理兵衛・理太郎親子および道理先生は、そろって名前に「理」の字を持っており、これは「早染草」の中心的趣向が「理屈臭き」であるがゆえだと考えられるからである。また登場人物の名前は、ときに作品の内容と関連させ、作者が工夫を凝らすところの一つでもある。例えば、家業に誠実に打ち込んでいた理太郎が堕落していくきっかけとなった遊女が「怪野」という名であることも、名付けが人物設定や話の筋と関連していることの好例であろう。目前屋親子の名前については水野氏が「『目前の利』（目の前のつまらぬ利益）を転化した命名であろう」とされているが、[注15]「利」ではなく「理」が使われていることには意味があるのではないだろうか。[注16]

この「目前の理」なる語は、「破瓜」でも使用されている。用例検証の際にも引用した部分で、京伝は田舎娘を持ち出して二者を和

睦させたことについて、自身で「『これ目前の理なり』」とまとめ、如来には「『わからねへ理屈だ』」と言われていたのであった。しかしこの用例に「目の前のつまらぬ利益」という意味を当てはめても、どうも釈然としない。ところで「目前の理」に似た言葉で一般に知られているものに「理の前」があり、この言葉は「道理に合ったあたりまえのこと・当然のこと」などと定義されている。[注17] 親子の名前に使われるのが「利」ではなく「理」でなければならないこともこれならば必然であるし、「破瓜」の用例に関してもこちらの解釈であれば文脈にうまく適合するのである。ゆえに、京伝が使用している「目前の理」とは「理の前」とほぼ同義と考えることができるのではないだろうか。

そうすると「早染草」の三人の主な登場人物は、「道理に合ったあたりまえのこと・当然のこと」という意味の名を持つ親子と、道理先生ということになる。登場人物の名に込められた意味も、「早染草」の趣向を読み解いていくうえで必要な情報となろう。

五

京伝による用例から浮かび上がった字義や使用傾向と、登場人物の名前に込められた意味を参考に、「早染草」における理屈とは何かを最後にまとめたい。

用例検証の結果を念頭に「早染草」を読み直してみると、善魂悪魂が働きかけを行った結果として理太郎がどのように振舞っているかを述べた文章が多いことに気付く。善魂は良い行いを、悪魂は悪い行いをさせるべく、それぞれ理太郎の皮肉に入り込もうとする。果たして理太郎は、善魂が入り込んでいるときは誠実に振舞い、悪魂が入っているときは堕落するという法則に忠実に従って行動し、体を所有する魂が交代したり勢力を拡大したりするのに伴って、その様が幾度も詳しく説明されているのである。

本稿では、寛政二年刊行の黄表紙を読み直すことによって、「理屈臭き」と教訓の間に関係性は見出せないという結論を得た。そして用例検証からは、「理屈」という語が他者を納得させるために自分の主張や文句をひたすら述べ立てる場面で使用されること、また主人公親子の名前に「道理に合ったあたりまえのこと」という意味が込められていることを導き出した。「早染草」の場合、道理にあったあたりまえの主張をするのは京伝で、それに納得する他者は読み手ということになろう。そしてあたりまえの主張とは、魂の働きに連動するように振る舞う理太郎についての説明がそれに該当すると考えられる。以上のことから、善悪どちらの魂にとりつかれているか、また魂の勢力はどの程度かという要素に即応して行動する理太郎について、幾度も律儀な説明文が連ねられていることを、「早染草」序で京伝が言う「理屈臭き」趣向であると定義付けたい。

序や口上からは「理屈」を敬遠する姿勢が読み取れることに加

え、多くの用例で「理屈」は負の語感をもって使用されていた。本来であれば忌避されるものであったために、新しさという点においては間違いないものであったが、「理屈臭き」を趣向とすることは大きな挑戦であったと想像される。しかし「早染草」が現代に至るまで多くの読者を獲得してきたことを考えると、京伝の試みは成功に終わったと言うことができるだろう。

（注1）以下、山東京伝の黄表紙の引用はすべて『山東京伝全集』第二巻「黄表紙2」（ぺりかん社、一九九三年）により、引用の末尾に頁数を括弧に入れて示した。なお、引用に際しては振り仮名を省き、傍線を私に施すなどの処置をとった。

（注2）岩波書店、一九五八年、二六および一九八頁。傍線は私に施した。

（注3）社会思想社、一九九七年、二五一および二八一頁。傍線は私に施した。

（注4）小学館、一九九九年、一七四および二四五頁。傍線は私に施した。

（注5）最近では佐藤至子氏が、理屈臭さを趣向とした寛政二年刊行の京伝黄表紙に対して「この当時の社会における学問の流行、自学自習の流行に応じてのものである」と述べ、序の「理屈臭き」を定義することはしていないが『早染草』に関しては「教訓的で滑稽、しかもわかりやすい」との評価をされている。『山東京伝―滑稽洒落第一の作者―』（ミネルヴァ書房、二〇〇九年）参照。

（注6）『江戸の戯作絵本』（三）の中で、例えば

しからば我国の姉子なんども。清く浄とし給ん哉（三二五頁）

という文言には

神道・国学の理想とする境地。手島堵庵の『前訓』の婦女六徳中に『清潔』（せいけつ・きよくいさぎよし）とある。（『江戸の絵本』（三）二五一頁）

と注を付され、理太郎が

「坊はおとつさんや、おかゝさんが大事だよ。穴一や宝引は、しねへもんだねへ」（三二八頁）

と両親に述べる箇所に関しては、

この場面は児童向けの心学講釈である前訓などの趣を出している。「坊はおとっさん云々」は「父母ほど世に大切の宝はない」（『道二翁前訓』）とか「先子供の穴一宝引。種柿西瓜の目引（中略）。その外比類残らず御停止ゆへ。一切禁制の事」（『道二先生御高札道話』）に対応する。（『江戸の戯作絵本』（三）二五七頁）

と解説するなどしておられる。

（注7）石川謙氏『石門心学史の研究』（岩波書店、一九三八年）。また、柴田実氏も『日本思想大系　石門心学』（岩波書店、一九七一年）の解説で、心学では金銭を扱う商人という身分の存在意義を主張すると同時に、正直と倹約の重要性を説いていることを述べて、「都鄙問答」の同じ箇所（傍線部）を引かれている。ただし梅岩が言う知足安分とは消極的なあきらめの気持ちではなく、「天ノ与ル楽ハ、実面白キアリサマ哉。何ヲ以テカコレニ加エン」（「都鄙問答」巻之一「都鄙問答ノ段」）とも述べられていることに触れ、「正直と倹約の実践を通じて、人びとにこの安心、このよろこびを知らせようとしたのが、かれの心学の根本精神であったとすべきであろう。」（四七四頁）と述べられる。いずれにしても、柴田氏も心学の教えのなかで「知足安分」を重要視されている。

（注8）『日本古典文学大系　近世思想家文集』（小高敏郎氏ら校注、岩波書

店、一九六六年）三九五頁。

（注9）石川氏による『校訂道二翁道話』解説はこれを「天明九年二月」「浅井きを女聞書」と記述するにとどめるが、『国書総目録』はこれを「天明九年刊」としている。

（注10）『校訂道二翁道話』（石川謙氏、岩波書店、一九九一年第五刷）所収。三一六頁。

（注11）注10に同じ。

（注12）ぺりかん社、一九九一年。

（注13）「京伝憂世之酔醒」（京伝画作）・「地獄一面照子浄頗梨」（京伝画作）・「先時怪談花芳野犬斑点」（京伝画作）・「張かへし行儀有良礼」（京伝画作）・「冷哉汲立清水記」（京伝作・自画か）・「大極上請合売心学早染草」（京伝作・北尾政美画）・「山鶏鵡蹴転破瓜」（京伝作・北尾政美画）・「太平記吾妻鏡玉磨青砥銭」（京伝作・喜多川歌麿画）の八作は『山東京伝全集』第二巻「黄表紙2」に収録。なお、本稿では『山東京伝年譜稿』に従い、「兎角亭亀毛画」を京伝画とみなし「京伝憂世之酔醒」「張かへし行儀有良礼」を京伝画作とした。

「図画通俗大聖伝」（京伝作・北尾重政画）は『山東京伝全集』第十五巻「読本1」（ぺりかん社、一九九四年）に収録。

「繁千話」（京伝画作）・「京伝予誌」（京伝作・自画か）・「傾城買四十八手」（京伝画作）・「田舎談義」（竹塚東子作・京伝序および跋）「文選臥坐」（佐保川狂示、蒼龍闕湖舟、梅暮里谷我共作・京伝序）の五作は『洒落本大成』第十五巻（中央公論社、一九八二年）に収録。

「福種笑門松」（京伝作・喜多川歌麿画）は『寛政笑話集』二（宮尾しげを編、小噺頒布会、一九三九年）に収録。

「小紋雅話」（京伝画作）は『日本名著全集』第十四巻「滑稽本集」（日本名著全集刊行会、一九二七年）に収録。

（注14）以下、山東京伝の洒落本の引用はすべて『洒落本大成』第十五巻により、引用の末尾に頁数を括弧に入れて示した。ただし、割書については山括弧に入れて一行書とした。なお、引用に際しては振り仮名を省き、私に句読点を施し適宜濁点を補った。また、傍線を私に施すなどの処置をとった。

（注15）注2に同じ。二〇〇頁。また中山氏も注3の『江戸の戯作絵本』（三）二五四頁で「『目前の利』の人名化」とされている。

（注16）文中、親子の名はすべて「理」字で表記されている。ただし人物の画への書き入れにおいて、父である理兵衛が「利」、理太郎が「理」となっているのは、二人を区別するためと思われる。

（注17）『日本国語大辞典』第二版（小学館、二〇〇二年）で「理の前」は「『り（理）の当然』に同じ。」とあり、「理の当然」の項を参照するとこのように定義されている。

―くぼた・あい、広島大学大学院文学研究科博士課程前期在学―